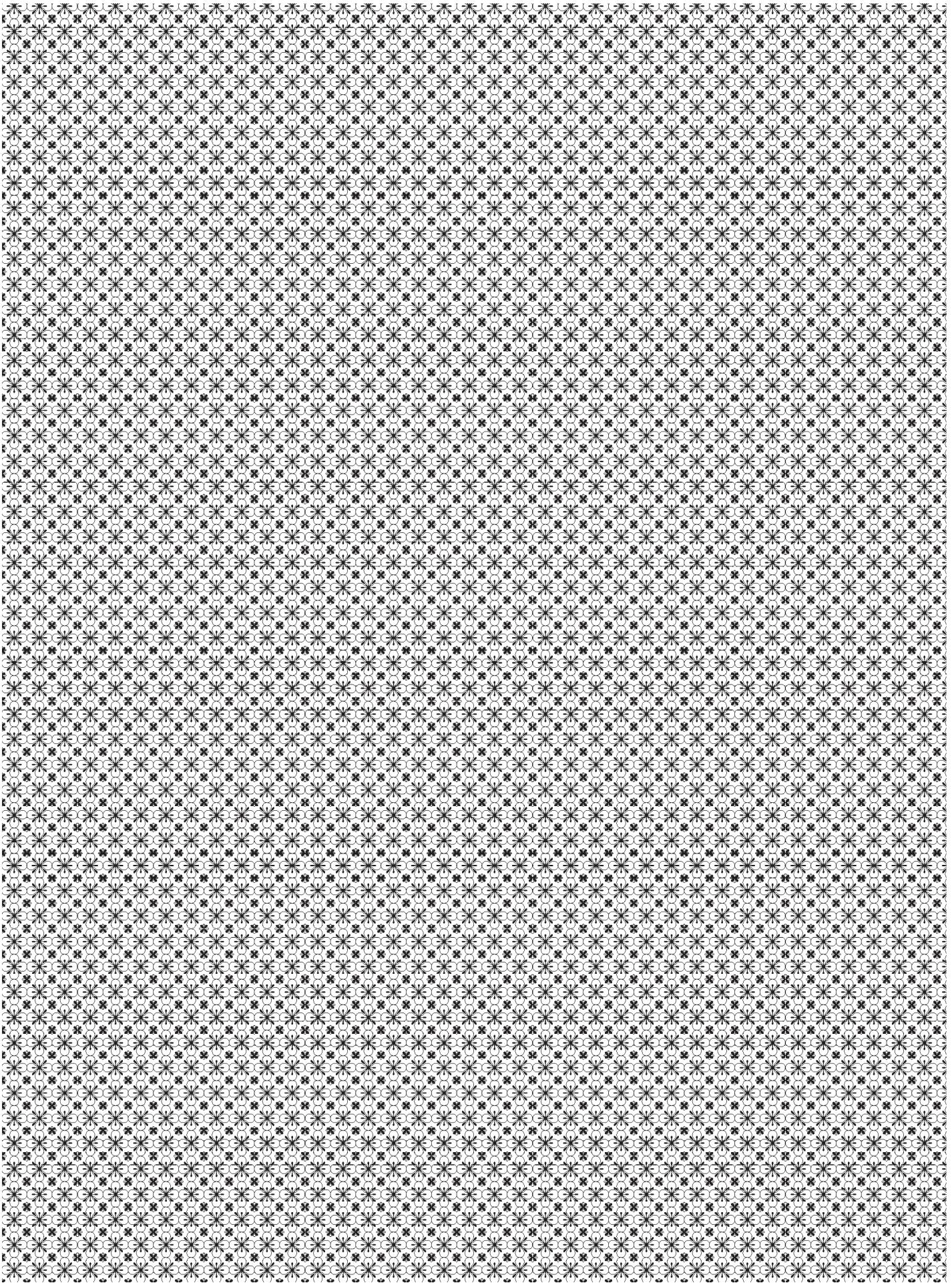


国語



国-2-⑤-共

〔問〕 敬語の使い方として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 君から議長に申し上げてください。
- 2 お客様は何時にまいりますか。
- 3 校長先生が、食事を召し上がっている。
- 4 先生、お休みはどちらにいらっしゃいますか。
- 5 私の母が、先生に言つておりました。

〔問〕

〔2〕 次の四字熟語の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【深謀遠慮】

- 1 深く考えて身を引くこと。
- 2 軽く考えて進行すること。
- 3 よく考え方を見通すこと。
- 4 隠で色々と画策すること。
- 5 浅薄な計略を巡らすこと。

〔問〕

〔3〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 気の置けない仲だから。

- 1 遠慮しないで気楽につき合える。
- 2 気になつて落ち着いていられない。
- 3 会話がうまく成り立たない。
- 4 会うのをためらつてしまう。
- 5 圧倒されつつも元気をもらえる。

〔問

4〕例文の（　）に当てはまる語句として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。なお、例文の横に（　）内に該当する語句の「意味」を添えているので参考すること。

【例文】私の心には、芸術家にも（　）があつてね。

〔ビラミッド型の上下関係に序列化された秩序・組織・階層制〕

1 トートロジー

2 ジェンダー

3 ノスタルジー

4 ヒエラルキー

5 エントロピー

〔問

5〕例文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】合格を心よりキネンしています。

1 キソク正しい生活。

2 開会式のキシユ。

3 体育祭のキバ戦。

4 投票をキケンする。

5 必勝をキガンする。

〔問題〕次の文章を読み、後の「問6」・「問10」に答えなさい。

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐つていると、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはつきり云つた。自分も確にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いてみた。死にますとも、と云いながら、女はぱつちりと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。

自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじゃなかろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに瞬たまま、やつぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云つた。

じや、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいって、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう云つた。
「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待つていて下さい。また逢いに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待つていられますか」

自分は黙つて首肯いた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待つていて下さい」と思い切つた声で云つた。

「百年、私の墓の傍に坐つて待つていて下さい。きっと逢いに来ますから」

自分はただ待つていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したようすに、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘つた。真珠貝は大きな滑かな縁の鋭どい貝であつた。土をくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿つた土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾つて来て、かるく土の上へ乗せた。星の破片は丸かつた。長い間大空を落ちてゐる間に、角が取れて滑かになつた。

たんだろうと思つた。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。

自分は苔の上に坐つた。これから百年の間こうして待つてゐるんだなと考へながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それがまた女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまで^{*1}のつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた^{*2}唐紅の天道がのそりと上つて來た。そうして黙つて沈んでしまつた。二つとまた勘定した。自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいには、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなかろうかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて來た。見る間に長くなつてちょうど自分の胸のあたりまで來て留まつた。と思うと、すらりと搖ぐ茎の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の薺が、ふつくらと弁を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂つた。そこへ遙の上から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花弁に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたつた一つ瞬いていた。

「百年はもう來ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

第六夜

蓮慶が護国寺の山門で^{*3}仁王を刻んでいると云う評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集まつて、しきりに下馬評をやつていた。

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹が斜めに山門の壇を隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗の門が互いに照り合つてみごとに見える。その上松の位地が好い。門の左の端を眼障にならないように、斜に切つて行つて、上になるほど幅を広く屋根まで突出しているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。そのうちでも車夫が一番多い。^{*4}辻待をして退屈だから立つてゐるに相違ない。

「大きなもんだなあ」と云つてゐる。

「人間を揃えるよりもよっぽど骨が折れるだらう」とも云つてゐる。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。私やまた仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」と云つた男がある。

「どうも強そうですね。なんだつてえますぜ。昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あ無いつて云いますぜ。何でも日本武尊よりも強いんだつてえからね」と話しかけた男もある。この男は尻を端折つて、帽子を被らずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頗着なく鑿と槌を動かしている。いつこう振り向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の辺をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい鳥帽子のようなものを乗せて、^{えほし}*素袍だか何だかわからない大きな袖を背中で括つていて。その様子がいかにも古くさい。わいわい云つてる見物人とはまるで釣り合が取れないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立つて見ていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇体ともどんと感じ得ない様子で一生懸命に彫つてゐる。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我れとあるのみと云う態度だ。天晴れだ」と云つて賞め出した。

自分はこの言葉を面白いと思った。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。自在の妙境に達している」と云つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を堅に返すや否や斜すに、上から槌を打ち下した。堅い木をひと刻みに削つて、厚い木屑が槌の声に応じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がつて來た。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念を挟んでおらんように見えた。

「よくああ無造作に鑿を使つて、思うような眉や鼻ができるものだな」と自分はあんまり感心したから独言のように言つた。するとさつきの若い男が、

「な、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つてゐるのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけつて間違はずはない」と云つた。

自分はこの時始めて彫刻とはそんなものかと思い出した。はたして（ A ）と思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから見物をやめてさつそく家へ帰つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出て見ると、せんだけの暴風で倒れた檼を、薪にするつもりで、^{あらし}*木挽に挽かせた手頃な奴が、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫り始めてみたが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その次のにも運悪く掘り当てる事ができなかつた。三番目にも仁王はいなかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を藏してゐるのはなかつた。ついに明治の木にはとうてい仁王は埋つていらないものだと悟つた。それで運慶が今日まで生きている理由もほほ解つた。

（夏目漱石『夢十夜』より（読み易さを考慮し、かな遣い、ふりがな等、原文の一部を変更した箇所がある））

*1 のつと：ぬつと。その状態のままで何もしないさま。

*2 唐紅の天道：深紅の太陽。

*3 仁王：仏門を守る神で、寺の門・須弥壇全面の両側に置かれる一対の金剛力士の像。

*4 辻待：路の傍で人力車夫が客を待つてゐること。

※5 素袍・素襪。室町時代に起こり、室町時代は庶民も日常に着用した。後に武士の常服となつた。
※6 木挽・木をのこぎりでひいて材木にすること。また、それを職業とすること。

〔問6〕傍線部I「黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて来た」とあるが、その理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 「自分」の□から約束の言葉を聞けた嬉しさと安堵あんどで、涙がこぼれ落ちたので。
- 2 「自分」の「女」への疑い深さを目の当たりにし、絶望し、涙が浮かんだので。
- 3 「自分」からの儀礼的な言葉に疑惑を感じてしまい、悲しさが込み上げたので。
- 4 「自分」の煮え切らない返事に絶望してしまい、はなはだしく心が傷んだので。
- 5 「自分」が死へ向かう恐怖が込み上げ、張り詰めていた気力が弱つたので。

〔問7〕

傍線部II「腕組をして」には「自分」のどのような気持ちが表現されていると考えられるか。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 百年を過ごしている間に、一体どんなことが起こるのだろうかとわくわくする気持ち。
- 2 百年という歳月の長さに耐えられないという不安から、約束を反故にしたい気持ち。
- 3 あの時の約束どおり、百年後に、本当に「女」が現れてくれるだろうかと疑う気持ち。
- 4 百年もの長い歳月を一人の「女」にささげる結果になつてしまつたのを悔やむ気持ち。
- 5 「女」が指定した百年という歳月に込められた本当の意味を解き明かしたい気持ち。

〔問8〕傍線部Ⅲ「百年はもう来ていたんだな」と「自分」がそう思った理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 「女」が「百年待つていて下さい」と云つたことに、「自分」は確かに待つていると答えたから。
- 2 遠い空に暁の星が瞬いており、その瞬きに「女」に欺されていた百年の経過を感じ取つたから。
- 3 墓石である星の破片の角が取れて丸くなつたのを見て、既に百年経過していたと直感したから。
- 4 星の破片に苔が生えている様子に気がつき、百年という月日の重みを改めて知り感心したから。
- 5 墓石の下から伸びてきた百合が開花したことを、「女」が「自分」に会いに来たものと考えたから。

〔問9〕

空欄Aに入る言葉として、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 誠か、いやそんなはずはない
- 2 そうなら誰にでもできる事だ
- 3 やはり運慶だけが特別なのだ
- 4 知識人の自分ならばできる事だ
- 5 良き道具を揃えればできる事だ

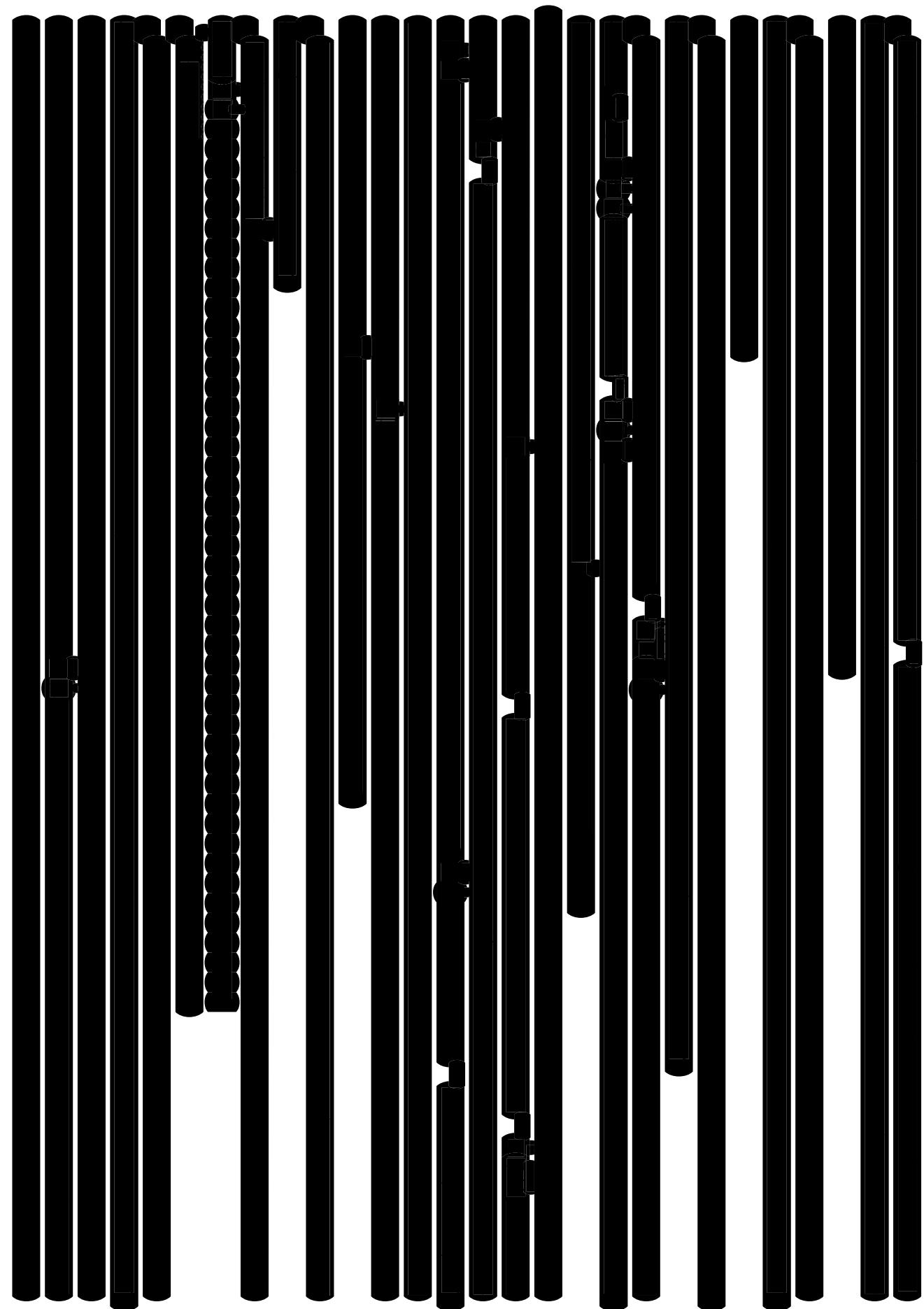
〔問

10 傍線部V 「運慶が今まで生きている理由もほぼ解った」とあるが、このとき「自分」はどのような考えに至ったのか。説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 素晴らしい仁王が彫れないのは、運慶の手法を学んでいないからであり、その手法を学びさえすれば、明治時代の人々でも運慶になるという考え方。
- 2 仏師が切磋琢磨した鎌倉時代の運慶の才能はあまりにも傑出したものであり、明治時代の人々は、常に運慶とその作品を尊敬しているという考え方。
- 3 運慶の手がけた像は不朽の名作であり、たとえ西欧化した明治時代になつたとしても、運慶の素晴らしい仁王は人々に感銘を与え続けるという考え方。
- 4 鎌倉時代の運慶には、他のことに影響されない自在に彫り抜く力強さがあるが、明治時代の人間たちには運慶のような力強さがないという考え方。
- 5 このような時代でも逸材を見つけるという自負心がある運慶だからこそ、明治時代の木にも逸材があると信じて仁王を彫り続けているという考え方。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問11〕～〔問15〕に答えなさい。

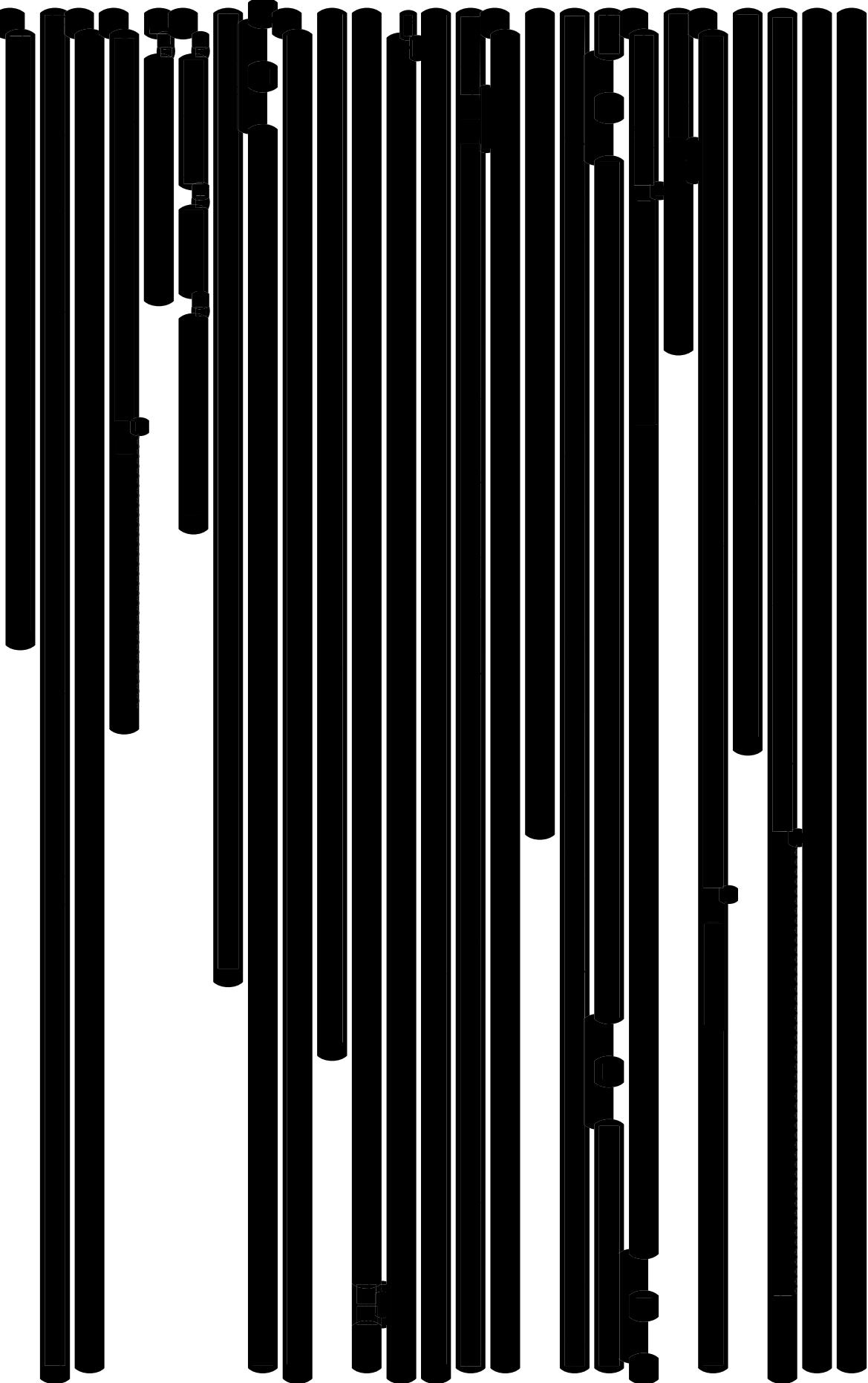
※著作権の都合で開示できません



※1 三嘆これ久しううする：おおいに褒めたたえること。たいへん深く感心すること。

※2 柳田國男：民俗学者〔一八七五—一九六二年〕。『遠野物語』は初期の代表作で、佐々木喜善の話を柳田が筆録したもの。

(三島由紀夫『三島由紀夫全集』第三十三巻より（本文は、一九七六年一月発行の「三島由紀夫全集」第三十三巻（新潮社）に拠る。）
問題文章収録にあたって、受験生の読み易さを配慮し、漢字・かな遣いを改めたほか、ふりがなを補つた。)



※3 陸中上閉伊郡：「陸中」は、現在の岩手県の大部分と秋田県の一部を含む古い国名。「上閉伊郡」は、岩手県南東部にある郡。明治時代には、現在の遠野市・釜石市・大槌町を含んだ。

※4 遠野郷：現在の岩手県遠野市。

※5 風：風習。「所の風」は、この地域の風習、の意。

※6 囲炉裏：屋内の床などの一部を切り抜いて、炭などで火を燃やし、煮炊きや暖房に用いた設備。

※7 炭籠：囲炉裏に継ぐ炭をとりわけておく籠。「炭取り」と同じ。

※8 あなや：驚きを表わす語。

※9 一にかかるて：ひとえに。もっぱら。

※10 上田秋成：江戸時代の読本作家・歌人・国学者〔一七三四一一八〇九年〕。

※11 白峰：『雨月物語』収録の怪異譚で、西行が崇徳上皇陵に詣で、上皇の怨霊と出会う話。

※12 崇徳上皇：〔一一九一一六四年〕。保元の乱に敗れ、讃岐国に配流された。

※13 円位：平安時代後期の歌人である西行〔一一一八一一九〇〕の法名。

〔問〕

11 傍線部I 「第二十二節の次のような小話」について、『遠野物語』第二十二節の内容として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 佐々木氏の曾祖母が歳をとつて亡くなつた時、棺に納め親戚の者達が集まり、その夜はみんな座敷で寝た。曾祖母の娘で乱心のため離縁させられた婦人もまたその中にいた。

2 裹の間は火の気を絶やす事を嫌う風習なので、祖母と母の二人だけは、大きな囲炉裏の両側に座り、母のほうは傍に炭の籠を置き、時々炭を足していると、ふと裏口から足音がする。誰か来たと思って見やると、亡くなつた曾祖母であった。

3 いつも腰が曲がって着物の裾を引きずつてしまつて、三角に取り上げて前に縫い付けているのはまさに生前そのままの曾祖母の姿の通りであり、着物の縞目にも見覚えがある。

4 棺にいるはずの曾祖母が、裏口から入つて來たので驚き、「あれえっ。」と思う間もなく、一人の女が座つている囲炉裏の脇を通り過ぎ、裾で炭取りに触り、それが丸い炭取りだつたため、くるくると回つた。

5 母は気の強い人なので振り返つて後を見送つたところ、曾祖母は親戚の人々が寝ている部屋に入ると、親戚一同が「おばあさんが來た」とけたたましい声で叫んだ。近所の人はこの声で目を覚ましてただ驚くばかりだつたと言う。

〔問

12] 傍線部Ⅱ「もういけない」のはなぜか。理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 触れてもいないので炭取りが勝手に空中でくるくるとまわり出したことで、これは裏口から入ってきた幽靈のしわざだということがわかり、にわかに恐怖感が増したから。
- 2 幻覚だと思い込みたかった非現実であるはずの幽靈が、現実の炭取りに物理的な作用を及ぼしてしまったことで、我々の現実の方を非現実だと見なさざるを得なくなつたから。
- 3 幽靈が現実の炭取りにぶつかり、くるくるとまわすという物理的な作用を及ぼした以上、幽靈はもはや次元の異なつた存在ではなく、現実の中に存在するものとなつたから。
- 4 幽靈がわれわれの現実世界の物理法則に従い、単なる無機物にすぎぬ炭取りに物理的力を及ぼしてしまったからには、幽靈が低俗な存在になり一気に興醒めしてしまつたから。
- 5 目前の幽靈に戦慄してしまった心と、炭取りにつまづくような愛らしい曾祖母が目の前に現れてくれたことに喜びしさを感じるという二つの心を保持するのが難しくなつたから。

〔問

13] 傍線部Ⅲ「このとき第二段階に入る」とあるが、それでは「第一段階」にあたるのは何か。説明として最も適当なものを次の1～5

のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 曾祖母の幽靈が出現した段階。
- 2 曾祖母の娘が乱心のため叫んだ段階。
- 3 死くなつた曾祖母のために親族が集まつた段階。
- 4 幽靈の着物の裾に触れて炭取りが回転した段階。
- 5 炭取りの炭が散らかる前の段階。

〔問〕 14 空欄 A・B・C・Dに入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- | | | | | |
|---|-------|-------|-------|-------|
| 1 | A 超現実 | B 超現実 | C 現実 | D 超現実 |
| 2 | A 超現実 | B 現実 | C 現実 | D 現実 |
| 3 | A 超現実 | B 現実 | C 超現実 | D 超現実 |
| 4 | A 現実 | B 現実 | C 超現実 | D 現実 |
| 5 | A 現実 | B 超現実 | C 現実 | D 超現実 |

〔問〕

15 本文の趣旨に合う説明として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 波線部X「こんな効果」とは、具体的に言うと、「裾にて炭取りにさわりしに、丸き炭取りなればくるくるとまわりたり。」の一行が「日常性と怪異との疑いのない接点」となり、この小話を「人の心に永久に忘れがたい印象を残す」「みごとな小説」たらしめているという効果のことである。
- 2 波線部Y「幻覚は必ずしも、認識にとつての侮辱ではない」とは、幻覚は、酒を飲んで意図的に引き起こすこともあるように、「幻覚」と承知の上で知覚することもできるものであり、人の現実認識そのものの崩壊を示すようなものではないという意味である。
- 3 波線部Z「そのとき炭取りは回っている」とは、西行が崇徳上皇の菩提を弔っている時に上皇の怨霊が出現するという、それ自体あり得ない話であるが、この「円位、円位と呼ぶ声す。」の一には、その非現実を現実と思わせる「根源的な力」が備わっているという意味である。
- 4 筆者は、昔感銘を受けた芸術の中に「小説」を発見することがあり、その端的な例として舞台『遠野物語』の一幕、死んだ曾祖母が裏口から家の中に入つて来た事件を挙げ、その舞台の小道具「炭取り」がまわるくだりに日常と怪異との接点があり、この舞台を「小説」たらしめていると記している。
- 5 小説とは、ありふれた日常性のなかに超現実の世界を出現させ、現実を震撼させて、人間をいままある現実の向こうに誘うものであり、その根源的な力は、言語そのもののなかにある。

